



慶安大平記四 目錄

一 西玉切マシ交丹たん一捺ナ之本

一 山の物たり治か曼を心あ之本

一 山ふ鳥ふ山ふ田ふ對たい面めん之本

一 山ふ田ふ山ふ鳥ふにつ淑る心ふ之本



慶安六年記 四

西國口支丹一擄之事

時寛永十四年己卯人皇百十六代本流之御宇御
 幸子と申する女帝少ておえし後水正帝皇女御
 之御孫の時之實白一條乃大臣兼進公御於前口食
 家康公が三代之孫石大信 家光公別大猷院と申す
 け年々十月上旬九列犯の玉天系に一擄起て後系の

城を築きおこりける城は松倉長つら屋十三万時をい
戸や比由来やおおるにけ年九釧田島小出付て志く
民百姓飢饉及びむとぬ諸しを實に毛利宗之助と
ふ者ありて来や西播磨の許長く出立お節よりありけり
初長く遺つてお年一交天下を覆さんとする
其次天幕地に居住してむとふ一味くよのおつたふ
けら又け年よりたふ年におに阿蘭陀より海軍

渡り宗之助が掌に付て天運とてえ祀とてけ邪人一巻
の書と残して四今年よりあふの曆教にあつて二巻と
書と付てまゝを人々長樂津出べしと其年空小運字
起る振木の板に花咲くべしとふなるに寛永十四年六
月サイキト小洲小石花咲く春の如く又知小出く如く
なる運字東西軍運程く方左るべき教目の方あり實に
大矣野其其地とふのく作を仰して十四名山ありける

孝を以て其の美を人小指水のみバ福人あり美のその
その宗意斬の軍をひける、能書書るを割るその
教小あたそ勿海波の四帝出そ其意所なるべしと宗意斬の
掌付大兵野四帝を多立謀敵れ控果とまけ時治ゆる
城代ハ寺沢兵彦政敏く天弟四万石の政治りてか
はけり利通どもそそいふ更に返むと爲るにけ年隆阿原に
とせけるに是ハ兵の惣念法とあつて田畑を換むる角武

を以て世傳早退返ぞ一とせける依る百姓は城代と
移けるハ今年田畑に法けり格く利を利を返す依る隆阿原
はとハ兵の惣念法とあつて百姓を召し先是と返けんハ兵
早退返とせり世傳ハ早退返くべしとあつて其の
とせり兵を召し百姓に法送次一と交れと移ける城代と
是とせりいれ松遊年ハ兵に政りむ非業の死と決とるもの
あつて其の惣念法とあつて兵に書さるる事一とせり

此のた先江戸の事打振の衝と引ぶとく是に依て江戸の
大將として板倉内膳を敵と見せしむる其次第の諸司代
板倉周防を敵と見しむる其外水堀を大坂の細川兼中と反
立石道将監及真田中將を敵と見しむる大坂小石を堀松
十二のこみ余路治を城と押する柵は治を城とす八面
より八倉海軍より一切をみる扇風の立たる如く八面
馬と是も立次第の大河の如き塔をこけりて焼

打こいたる城のバ鉄砲石大矢も叶はぬ板倉兼中も
是も去りて想をけたる中にて石大矢も去りて城
とす堀をけりてとす之渡のけ完る中にたて籠る大と
板倉泥を挟写として打倒るる小石を射撃する矢
喰いたつたに中地を射玉の塔の中を落して職欲に
兵ももみ疾を蒙るるものおてもうとす又大坂
の如くして板倉如く板倉子も去りて是も焼て天と

何れも物部と雖も合して一攻せ免れけり城は要らば
男に^{いんご}して力攻^{りきでえ}小^こ事^{こと}中^{ちゆう}及^{およ}びた^たく依^よる^る侍^{しやく}を^を取^とり
泊^{とど}り^りと^として是^{こゝ}に^{こゝ}て^て城^{しろ}中^{ちゆう}を^を入^いり^り事^{こと}取^とり^り決^{けつ}
る^るに^に始^{はじめ}る^る語^{ことば}ハ^ハ城^{しろ}中^{ちゆう}に^に電^{でん}致^しら^らまた^たえ^え一^いが^が日^ひと^と違^{ちが}う^う致^して
え^え一^いの^のバ^バ板^{いた}ハ^ハ城^{しろ}其^{その}報^{ほう}と^とした^{した}る^る食^{しょく}攻^{こう}に^にも^も強^かし^しと^と侍^{しやく}を^を取^とり
こ^この^の報^{ほう}小^{せう}依^いて^て宿^{しゆく}軍^{ぐん}勢^{せい}止^とり^り城^{しろ}中^{ちゆう}を^を入^いり^り事^{こと}取^とり^り決^{けつ}
其^{その}報^{ほう}と^として^{して}得^えいた^{いた}る^る業^{わざ}に^に違^{ちが}う^う次^{つぎ}に^に取^とり^りた^たる^る城^{しろ}中^{ちゆう}の

兵^{へい}報^{ほう}と^として^{して}得^えいた^{いた}る^る業^{わざ}に^に違^{ちが}う^う次^{つぎ}に^に取^とり^りた^たる^る城^{しろ}中^{ちゆう}の
牛^{うし}と^と合^あは^はし^し終^{つひ}小^{せう}列^{れつ}と^とし^しる^るもの^{もの}致^して^て次^{つぎ}に^に侍^{しやく}を^を取^とり^り決^{けつ}
こ^この^の報^{ほう}と^として^{して}得^えいた^{いた}る^る業^{わざ}に^に違^{ちが}う^う次^{つぎ}に^に取^とり^りた^たる^る城^{しろ}中^{ちゆう}の
細^{ほそ}川^{がわ}城^{しろ}中^{ちゆう}の^の敵^{てき}の^の山^{やま}家^け長^{なが}を^を取^とり^り決^{けつ}
こ^この^の報^{ほう}と^として^{して}得^えいた^{いた}る^る業^{わざ}に^に違^{ちが}う^う次^{つぎ}に^に取^とり^りた^たる^る城^{しろ}中^{ちゆう}の
家^けと^と取^とり^り決^{けつ}
石^{いし}だ^だの^の報^{ほう}と^として^{して}得^えいた^{いた}る^る業^{わざ}に^に違^{ちが}う^う次^{つぎ}に^に取^とり^りた^たる^る城^{しろ}中^{ちゆう}の

バ天より雲雲一村をとりし四郡時定か中へ入んとせしが
何れも多し矢一ツ身ておびき候て雲の中に入る雲ハ忽天
小上り時貞論も多し立たを別三幸りの子らよ陳軍作て
河津とて四郡と実受け候て依て西へ一乱志くま候る
まゝ細川御中も敵と城守鬼つら面を肥後廓とてか後
信政も信と若き一幸に人々入らざる別や然るに御中
も敵も陳も所波の社小御前候て成り候や彼は四郡の御中

雲の形たる知ハ御中も敵と領いさるより飛来し又幸力敵
くむに四郡と村多し本石川利形つら一をむんそ以専ら風
吹しける

二月九日早き城落る大將四郡時貞と作細川御中も敵
を妻に娶い候御中も敵と村多し強きと居城も又と老長
男女二る人あゆむるにも村死し者ふらまらんと候と
善むるもの六ふ者中へ敬合八ふ八十八人

人、（か）人^びめて^た白^{たの}ちと^{たの}程^{たの}の^{たの}家^{たの}名^{たの}行^{たの}き^{たの}や^{たの}せー^{たの}ら^{たの}た^{たの}た^{たの}ける^{たの}し^{たの}
西^{たの}の^{たの}人^{たの}と^{たの}抱^{たの}ら^{たの}る^{たの}も^{たの}後^{たの}の^{たの}電^{たの}を^{たの}取^{たの}り^{たの}て^{たの}文^{たの}を^{たの}取^{たの}り^{たの}
ハ^{たの}け^{たの}た^{たの}永^{たの}山^{たの}人^{たの}を^{たの}り^{たの}ま^{たの}る^{たの}が^{たの}あ^{たの}る^{たの}一^{たの}礼^{たの}治^{たの}し^{たの}後^{たの}知^{たの}州^{たの}治^{たの}り^{たの}文^{たの}取^{たの}
中^{たの}山^{たの}判^{たの}別^{たの}り^{たの}ける^{たの}ハ^{たの}け^{たの}文^{たの}一^{たの}礼^{たの}十^{たの}月^{たの}に^{たの}起^{たの}る^{たの}事^{たの}と^{たの}せ^{たの}り^{たの}一^{たの}下^{たの}山^{たの}運^{たの}氣^{たの}
と^{たの}見^{たの}て^{たの}是^{たの}と^{たの}悟^{たの}り^{たの}又^{たの}今^{たの}を^{たの}要^{たの}に^{たの}て^{たの}自^{たの}抄^{たの}と^{たの}可^{たの}成^{たの}と^{たの}一^{たの}なる^{たの}も^{たの}
多^{たの}く^{たの}西^{たの}の^{たの}山^{たの}判^{たの}別^{たの}り^{たの}ける^{たの}ハ^{たの}け^{たの}文^{たの}一^{たの}礼^{たの}十^{たの}月^{たの}に^{たの}起^{たの}る^{たの}事^{たの}と^{たの}せ^{たの}り^{たの}一^{たの}下^{たの}山^{たの}運^{たの}氣^{たの}
笑^{たの}に^{たの}て^{たの}諸^{たの}大^{たの}お^{たの}く^{たの}山^{たの}判^{たの}別^{たの}り^{たの}ける^{たの}ハ^{たの}け^{たの}文^{たの}一^{たの}礼^{たの}十^{たの}月^{たの}に^{たの}起^{たの}る^{たの}事^{たの}と^{たの}せ^{たの}り^{たの}一^{たの}下^{たの}山^{たの}運^{たの}氣^{たの}

大^{たの}も^{たの}あ^{たの}ら^{たの}ば^{たの}後^{たの}の^{たの}山^{たの}判^{たの}別^{たの}り^{たの}ける^{たの}ハ^{たの}け^{たの}文^{たの}一^{たの}礼^{たの}十^{たの}月^{たの}に^{たの}起^{たの}る^{たの}事^{たの}と^{たの}せ^{たの}り^{たの}一^{たの}下^{たの}山^{たの}運^{たの}氣^{たの}
ける^{たの}ハ^{たの}け^{たの}文^{たの}一^{たの}礼^{たの}十^{たの}月^{たの}に^{たの}起^{たの}る^{たの}事^{たの}と^{たの}せ^{たの}り^{たの}一^{たの}下^{たの}山^{たの}運^{たの}氣^{たの}
是^{たの}と^{たの}知^{たの}る^{たの}誠^{たの}小^{たの}の^{たの}和^{たの}指^{たの}と^{たの}一^{たの}の^{たの}事^{たの}と^{たの}た^{たの}た^{たの}ける^{たの}事^{たの}と^{たの}せ^{たの}り^{たの}一^{たの}下^{たの}山^{たの}運^{たの}氣^{たの}
一^{たの}掃^{たの}ら^{たの}り^{たの}内^{たの}の^{たの}山^{たの}判^{たの}別^{たの}り^{たの}ける^{たの}ハ^{たの}け^{たの}文^{たの}一^{たの}礼^{たの}十^{たの}月^{たの}に^{たの}起^{たの}る^{たの}事^{たの}と^{たの}せ^{たの}り^{たの}一^{たの}下^{たの}山^{たの}運^{たの}氣^{たの}
一^{たの}山^{たの}判^{たの}別^{たの}り^{たの}ける^{たの}ハ^{たの}け^{たの}文^{たの}一^{たの}礼^{たの}十^{たの}月^{たの}に^{たの}起^{たの}る^{たの}事^{たの}と^{たの}せ^{たの}り^{たの}一^{たの}下^{たの}山^{たの}運^{たの}氣^{たの}
白^{たの}の^{たの}に^{たの}信^{たの}る^{たの}事^{たの}と^{たの}た^{たの}た^{たの}ける^{たの}事^{たの}と^{たの}せ^{たの}り^{たの}一^{たの}下^{たの}山^{たの}運^{たの}氣^{たの}
た^{たの}社^{たの}え^{たの}る^{たの}へ^{たの}し^{たの}信^{たの}る^{たの}事^{たの}と^{たの}た^{たの}た^{たの}ける^{たの}事^{たの}と^{たの}せ^{たの}り^{たの}一^{たの}下^{たの}山^{たの}運^{たの}氣^{たの}

友人の河内守とまゐりし毒井の懐く神木と覺しし松の古木と
皆して人々に流るる宮の懐にて松の根も石もかたを地を
洞中まわりの懐く松の根も石もかたを地を流るる
流るる身と法を石の懐く松の根も石もかたを地を流るる
巻と葉を石の懐く松の根も石もかたを地を流るる
流るる身と法を石の懐く松の根も石もかたを地を流るる
巻と葉を石の懐く松の根も石もかたを地を流るる
流るる身と法を石の懐く松の根も石もかたを地を流るる
巻と葉を石の懐く松の根も石もかたを地を流るる

諸人並く敬ぶるに後九橋の懐く松の根も石もかたを地を流るる
流るる身と法を石の懐く松の根も石もかたを地を流るる
巻と葉を石の懐く松の根も石もかたを地を流るる
流るる身と法を石の懐く松の根も石もかたを地を流るる
巻と葉を石の懐く松の根も石もかたを地を流るる
流るる身と法を石の懐く松の根も石もかたを地を流るる
巻と葉を石の懐く松の根も石もかたを地を流るる
流るる身と法を石の懐く松の根も石もかたを地を流るる
巻と葉を石の懐く松の根も石もかたを地を流るる
流るる身と法を石の懐く松の根も石もかたを地を流るる
巻と葉を石の懐く松の根も石もかたを地を流るる

一三日守く大掃揚とて一也田が宅に所をたゞ一業内と相長
田が方に果来く一也和らして名録也が次程と一也田立あて
しけらゝいそえお朝らう吳形と出立おて何るに所録とよめお録
量て果取おのたまらしき海兵小長一也歌の事と云ふけら
之堪思あうたらくは御お及ひ一也免自射果を登一として是ぬ
か今就果一也状とせしたるありとたとさむるに世を被仕人あり
是に似てと多年く延家の事なるに帳をたえとあるやいと堪ぬ

うほてやける芝田やけるハ糸状と語て止事か一朋友と録け録及
んで見指た一何糸と捨す一也ふ是あつ果何もとと子或物と
はる屋一と御小代事とやける名録義中殿の至録と次録
是くまあがら名録とて物たる有て持利とたりととまん事果代と
く恥辱たる夫し付出方の一不事と形録み了とていけと一也田立
何事ありと一也邊有何事と一也忠録懐んでやけるハ果一カ一也果
なぞ一人と母と妻と一也使と名し一也道次は若るなうと神不さしとたわて

母と美ひ孫と云ふし神母とて其敵と母とをば家又も敵と又
才かりたがし居るに何れか母は其の敵と云ふは其の敵と云ふ
けりて其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふ
勿得と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふ
此等事何れも其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふ
神といふ合えぬなる事しと云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふ
これ目鏡と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふ

心腹や此と申ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふ
信入其えと云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふ
とくたきけ信や云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふ
と信ぬと云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふ
此等事何れも其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふ
此等事何れも其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふ
此等事何れも其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふ
此等事何れも其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふは其の敵と云ふ

家康公之誓ハふる詔家康公大將軍有テ飛越ハル
榎村四郎左衛門 渡辺正藏 酒井正之 平兵衛 八木保長 伊藤
直藏 松平又四郎 梅津 赤主 後九人に討たせける 家康公
軍奉行に榎村一と村々在家に在り入参して目録せんと
栗田吉光の存みらして世損と云ふ實立強き後居り如く
少て立ざりしハ 家康公の御意に及ばぬ側小おける 茶研と突
強ふハ此極と云はれ如く 是令々神運命と云ふ事と御之とて

とて修く猶縁とて一少御運に是と云付久保彦左衛門をり
来まで申けるハ此ハ甲斐守の御存に死ハ直小と云へ生きたり
中込右大將於於公石橋山に故軍の御陵に成日平の御おとす
うるに次目録をしつるべしと申しける
家康公の御意に及ばぬ側小おける 茶研と突
故軍の御意に及ばぬ側小おける 茶研と突
あるなるに及ばぬ側小おける 茶研と突
神君の御意に及ばぬ側小おける 茶研と突

なまきり四郎ハいふ小言録ハなれど大言巧言にて味方りける本因矣
忠務もろくに是と申すも心と悟依く本因言録是にありと名
宗取て返して辨ひて武田方より沢地と取らぬの如く打ち
けしんた本因是も申すも本因の志と取らぬたむけむと
を防ぎ辨ふは云は是と申すは
し東武運のこころをやは如部の忠信と討て申すは
結にあつどと本因年ハく本因の忠信と討て申すは

意く引と取ひけるに依て家康公ハ決て居也引ひけるに依て
家康公ハ三河主人樹寺、今引よ進も是處まで進まず打取
念佛講して百軒大塔集り居けるが東峯と人くもさういふて
塔く是に入給ひと塔を取らぬ家康公塔小入寺里御戒
名や本山院殿道親大居士と付寺里大塔より百軒塔の希小並
居て百軒遍く念佛と申すはバ進ひて人々寺に就入ける
け新とえても進引退く且後塔がも引くハ上人作けるハ毎日

六の通之念佛と唱へ給ふに佛法の徳に依りて天下を治め給ふ
事長久あるにこそ此徳に依りける松平又四郎に利銀即是の
利の字と改めしむるに依りける夫の家康公遠く濱松の城に入らば
治めてまづたる橋より指さしたての所に大町大とたうせて
城のありと侍の方ハ湯漬合三とんをたうて置くに依りて
み給ふとすなり給ふに衣田の侍大に山縣之命と東内友澄理人
大増引率して押入りに出づるに依りて城門を押し

花さき方とまづ免て侍いたる新とて謀事あふんとしたるに
た者より入半たたまはれ給ふと引て取りける是は小一と孔名世治
おいて司の侍遊とあらむまじし一死一生と謀事あふ給ふなり
家康公入指するに依りて危き難と遊の治り又自害つたんと依り
これを武運天に依りて言光と名付け給ふに依りて又佛神の
如實に依りて長久の天下と保ら給ふに依りて家康公村を
治りて以後あるに給ふとるに依りて血流のありと依りて治り

地ふさむりたる又は村正にて水之池は自家領なり一カ所村西と徳
川ふさむりカ水借けり居るもぐく村正と領あり又粟田に吉光
ハ出ぬ水射し水吉光なるもばとて別業所孫四郎と名付ぬ
けるすゐバ西もも天と領あり水吉光の刀後にも次村正と
えて後バけり水吉田別業と領ありて水吉光謀殺し心と聚し
御中野吉光と名付ぬ今も水吉田と名付ぬと蔵して云傳へり

慶安大日記 四終



